

うしろ髪

泉鏡花作

—

「御免なさい。」

格子戸の外に媚めかしい聲がした。

夏の午過ぎのこと彼是四時間近といふ頃である。

麻布飯倉邊の、唯ある路地の棟割長屋のはづれの

家で、冬は相應に凌ぎ可いが、いかに蒸暑くつても

葭簀に入替へようといふ所帯ではなし、はづして了

へば、夜食の菜も外から見透かされるから不得止、

たてたまゝで置く障子の蔭の、此の上口の三疊に引

出つきの杉の机を控へて、川邊旬作といふ青年、家

に遠縁のもので此處に寄宿をして居るが、都合あつ

て今日は食べないで歸つた、朝々持參で區役所で開

く筈の腰辨當を、お八ツがはりの退屈凌ぎにやつて、

正に一口頬張つた處で應ともいはず。音信れたもの

は答も待たないで、がらりと開けた格子戸を閉めも

せず、早や框を上つて入つたのでぼんやり顔を向け

ると目の前に二十ばかりの婦人、水色縮緬の扱帯で

細腰を縊るばかり幅廣に引緊めたが、引掛けに結んだ繻子の帯は少しずり下つて居る、薄お納戸の地に紺で琴柱を染めた中形の浴衣、際立つて目の涼しいのが、銀杏返にさした簪の耳を一寸おさへ、

「御免なさいまし、おかみさんは、」とそは、

「する。」

「宅であります。」ともの／＼しく、旬作は膝に手を置いて、ぢつと打守ると、婦人は涼しい目を奥の方へそらして、

「お宅？ おかみさん、一寸おかみさん、」と呼びながら、次の六疊をつか／＼と斜に切つて、一段高くなつた長四疊へ飛ぶが如くに上つた。こゝに長火鉢が置いてある、傍に蠅取瓶、柱掛に團扇四五本あり、横に蠅帳と並べた筆笥の上にな小々な招猫、お定まりの縁起棚、下の六疊で待たして此處で髪を結ぶのであるから、脊の高い鏡臺、たゞう紙、廣めのために頼まれた、花の露、月の雫、音羽菊などゝいふ類の小瓶をならべ、茶道具を置いた火鉢の際の壁へ棹を渡して、禪、前垂、手拭が／＼つて居る。

今此の中へ衝と立つた婦人の姿を逸早く認めて、

「おや、お新さん。」

といひさま勝手から出て来たのは、女主人で
光といふ髪結、いつも午過から花主廻をするのだけ
れども、差當つた鬘と島田をあくる日に延ばして、
今日はどんたくを遣つたが、暑さが烈しく、おち／
＼晝寐も出来ないので、少々日影のある臺所へ出て、
板の間へ足を揃へてずっと投出し、水口を開けても
押被さるやうな大屋様の土藏の白壁を、まんじり下
の方から段々影になる日脚をニめて居たのが、目の
覺める美しさをいそ／＼と迎へたのである。

「おかみさん、」と美しいのはお光の肩へ立ち
ながら手をかけて、ひつたりと差寄つて、

「あのね、」

「入らつしやい。」とお光は急込む女客の顔を
見ながら落着いて澄していふ。

「いゝえ、さあ、」と少しじれる。

「何うしたの。」

「耳をお貸しなさいな。」

「唯、」と大きく。

「厭いやですよ。」
「といつたが片手かたてで其その肩かたをおさへたまゝ、例れいの簪かんざしの耳みみを一ちよいと寸。

「来たわ。」

お光みつは耳みみを貸かしたまゝ二ふたツばかり額うなづいた。

「むゝ／＼。」

「何うしよう。一寸、」

「何うしようつてまあ此方へお入れ申すのさ。」

「はあ、」

とばかりお新はうつかりな顔で居る。

「其のつもりになつてるんぢやあないか、何をせ
ツせいつてるのさ、何うしたの、そして、お

連様。」

お新は吻といふ呼吸をついて、やゝ衣紋の亂れた
のを、袂の尖ではた／＼と煽いで默然。

お光は手を伸して柱なる其の團扇を取らうとして、
「まあ、お坐んなさいよ、何をそは／＼して居る
んだね、お前さんは。」

「おほ、暑い。」

煽いで居た袂の端を口に銜へ、雪のやうな頸脚を
伸べて俯向いて軽く後毛を搔上げながら、お新は微

笑^えんで嬉^{うれ}しさうなり。其^{その}顔^{かほ}色^{いろ}を正^ま面^{もと}に熟^{じゆつ}と視^みて、
「可^いい加^か減^{げん}になさい。」と礎^{はた}と胸^{むね}を突^つかうとす
る、掌^{てのひら}をよげざまに膝^{ひざ}を丁^{とん}とついて、お新^{しん}は平^{ひら}
つたく坐^{すわ}つた。

「何^どうかしてよ、此^{この}人^{ひと}は。」
「だつておかみさん駈^か出^だして來^きたんですもの、一
體^{たい}來^きやうが早^{はや}いのよ。私^{わたし}や日^ひが暮^くれてからのつもり
だつたのに今^{いま}頃^{ころ}何^どうでせう、ばら／＼人^{ひと}通^{とほり}のある中^{なか}
を眞^{ほん}個^とに極^{きま}り悪^{わる}いつたらありませんでしたよ。」
と未^{いま}だ忙^{せは}しいゝきをつくのである。

お光^{みつ}は長^{なが}火^ひ鉢^{ばち}のむかうへ中^{ちゆう}腰^{こし}になつて、
「へい、それぢやあ此^この日^{ちつちつ}中^{ちゆう}また手^てを引^ひき合^あつて
おいでなすつたかい。」
「あれ、然^さうぢやあ無^ないんですが、だつて、來^きや
うが疾^{はや}いんぢやアありませんか、私^{わたし}や日^ひが暮^くれてか
らのつもりだつたのに。」
とお新^{しん}は更^{さら}にかこがましい。

これが爲^{ため}に髮^{かみ}結^{ゆひ}も眞^ま面^め目^めになり、

「可いぢやあないかね、私^{わたし}ん處^{ところ}は朝^{あさ}ツからでも構^{かま}はないんだから。然^{さう}して何^{なに}うしたの、其人^{そのひと}は。」
「其處^{そこ}まで來^きて居^ゐませうよ、私^{わたし}は先^{さき}へ駈^{かけ}出して來^きたんですから、」

「まあ、」

「おかみさん、濟^すみませんが一寸^{ちよいと}、見^みて下^{くだ}さいな。」

「私^{わたし}に、」と重^{おも}々^くしく、故^{わざ}と眞^ま顔^{がほ}になられてお新^{しん}は簪^{かんざし}の耳^{みみ}をおさへて、少^{すこ}し顔^{かほ}を斜^なめにして極^{きまり}の惡^{わる}さうに、

「はあ、後^ご生^{しやう}だわ。」

「唯^{はい}、唯^{はい}、唯^{はい}。」といつて、衝^つと立^たつと前^{まへ}掛^{かけ}の下^{した}へぐいと手^てを入^いれて下^{した}じめを緊^しめ上^あげながら、ばた／＼と臺^{だい}所^{どころ}の板^{いた}の間^まを鳴^{なら}して水^{みづ}口^{ぐち}から路^ろ地^ぢへ廻^{まは}つた。

お新^{しん}は見^み送^{おく}つて意^い味^みもなく氣^き拔^ぬけがしたやうに莞^{にっ}爾^りする。

鉢^ちの向^{むか}う、お新^{しん}の前^{まへ}へ膝^{ひざ}を分^わけて踞^{つくば}つた。
背後^{うしろ}から大^{おほ}跨^{また}につか／＼と遣^やつて來^きて無^む手^ずと長^{なが}火^{ひば}

旬作じゆんさくの長い顔ながかほが目前めまきへ出るとお新しんは身を交かはすが如ごとくに座ざを開ひらいて、ずっと立たつて、表おもての間まへ下おりて路ろ地に面めんする格子かうしから簾越すだれこしに外そとを覗のぞいた、後姿うしろすがたは一ちよいと寸すん小腰こしを屈こむめたのである。

其時そのとき夏帽子なつぼうしの小形こがたなのを左手ひんでに取り、白しろの手巾はんかちいふを持もつた手てを胸むねに置おき、紺こん紺がすりに縮緬ちりめんの帯おび、素足すあしに駒こま下駄げたを穿はいた二十二三にじふさんなのが、恥はぢたる姿すがた、内端うちはに路地ろぢの溝板どぶいたを渡わたつてお新しんが覗のぞいてる簾すだれのついで外そと。

「あゝ、もし其處そこでございます。」と向むかうでお光みつの呼よぶのが聞きえる。

お新しんは我われ知らず顔かほを赤あかめた。

男をとこは振返ふりかへつて會釋あしやくをしたが、やがて開あけたまゝの門口かどぐちをずつと。

「おゝ、」

男は玄関へ入るが否や、其時まで簾に顔を押し付けたまゝで居る後姿に向つて懐しげに呼懸けたが、お新が振向いたのと顔を合せて、

「驚いた、何うも弱つたよ。」 と打解けた中と見える。

「入らうと思つても何だか勝手が、」 と何か言はうとして口をつぐんだ男は、長火鉢の前に食後の湯を飲んで居る旬作の長い顔を見たのである。

知らぬ顔をして面を背け、お新と少し離れながら背中合せになつて、所在なげに天井をニめて立つたまゝ手なる帽子を下にも置かず。

旬作は無頓着に、仰向けに湯をがぶり／＼と飲む。「御遠慮なさらなければ可うございますのに、」まづ聲が聞えて勝手から静かに出て、旬作の背後へ立つたのは髪結である、突かけ穿の後齒の下駄は水口の土間で脱いで來た。

「お新さん、彼處に立つて在らつしやつたよ。」

お新は何方ともつかず唯、

「濟みませんね、」と小聲なり。

旬作はぬいと立つたが、廣くはない六疊敷の片隅に居る男に擦合ふばかりにして、又元の玄關に歸つて机の前に圖抜けた大きな足を廣げて胡坐を搔いた。

「さあ、何うぞ、こんな處でございますから、お氣味が悪うございせうが、まあ、これをお敷きなすつて、」と座蒲團を二ツ左右へひらりと捌く。

「おかみさん何うぞもう、」と膝を支いてお新は風采さへ物越まで尋常に片づける。

「さあ、お召ものが汚れますから。」

「否、」といったが、其の座蒲團に坐つた、男は膝の下へ兩手をさげて、

「お邪魔をいたします。」と極つた挨拶、優しく頭を下げる。

「おや、勿體ないあなた、」と驚いたやうに謂ひながら、引返して向うへ立つ。

お新は人知れず男の顔をぬすみ見て目でもものを謂はせたのである。要するに髮結如きに其の頭を下

させた之も誰ゆるといふ仕打。

男は黙つて摺つた手巾を別の手に持替へる。

此の間にお光は長火鉢の火を煙草盆に活けて灰をくる／＼と火箸で廻して、團扇を二本、両手に両方を持つて再びそれへ。

「もし、お使ひなさいまし。」

これも又男の前と氣を着けて、故とお新に綺麗言葉、裏梅を紫と淺葱とで描いた方を一本お新に差向け、

「お暑うございますこと、もう晩方でございますのに、些とも風がございませんね。」

と話は女にして男を煽ぐ、自分が持つたは繪團扇で、此奴を横煽ぎに些と大手にこなす。

「一雨かゝりますと可いんですが、」とお新もうしろの方から見ないやうにしてそつと男を煽いで遣る。

この深切な風の中に彼方此方、彼方此方、件の手巾の頻に動くのが眞白なので涼しさう。

玄關の暑さは又格別である。旬作は飯を食つたり、湯を呑んだり、だく／＼と沸く額の汗を握拳で横に

撫なでた。
此この間あは纒ひに敷居わ一ず個か、柱はありて、隔へをだな
すのみ、障子しやうじなく襖ふすまもあらず。

四

「まあお緩りなさいまし、こんなですが、蚊は其の割に居ないんでございますよ、ねえ川邊さん。」
唐突に聲を懸けられたので、旬作は何事とも辨へず、

「はあ、」

「眞個に蚊にや樂ですなえ。」

「はあ、居ますですな。」と調子はづれ。餘り膠のないことを謂はれたので、此方の三人申合せたやうに齊しく玄關の方を見向いた。

髪結は苦笑ひ、

「お前さん無性で蚊帳を釣らない癖に、ねえお新さん、いくら居ないたつて夜中には出ようぢやありませんか。そして暑いつちやあ身體へ霧を吹いて寝るんですもの、蚊が附着いたら放れッこはありませんやね。」

客を煽ぐ手を忙しくして早口に喋舌りかけたが、不圖心づくと、お新が何時の間にか團扇の手をかへ

して、自分の方を煽いで居るので、大業に座を開いて、

「おや／＼、飛んでもない、私といふものも可い氣なもんだ。どれ些と働きませう。」と身を退りさまに又長火鉢の向うへ行つて、茶棚から盆を下すのを、お新は手を留めて見て居たが、

「おかみさん、何うぞ、あの私が生りますから、」
ふいと男の傍を離れて素通に立つて行つて、簪の耳を押へながら二ツ三ツ囁いたと思ふと、髪結は頷いて笑を含んだ。

「ぢやあなさいまし。私は臺所の用が少し、其に洋燈掃除もあるし、精々働くんですよ。」と命ずるが如くに謂つて、懸棹の襷を取る手も早く腕を潜らして、勝手の方。

お新は後へ入交つて、きらりとするぶりつきの茶入の罐を片膝立て、斜に取る、四邊へ黄昏の色が迫つた。臺所でかた／＼と柄杓の音。

旬作は次の間へ首を伸して、そつとお新の方を見

ると、お新も丁ど其の様子を窺つてたので、期せずしてひよつと面を合せた。旬作の頭は叩かれたやうに机の上へ引込んで、渠は頬杖をついて、前なる破障子を見たのである。

お新はいやな顔をしながらおなじく横を向いて、鐵瓶を重いものゝやうに取扱つたが、黙つて茶盆を持つて来て、男に並んで、黙つて手をついて、黙つて茶をうつして、黙つて茶臺に乗せてそつと出すのを、男は黙つて手に取つたが、目で玄關の方を知らせて、顔で差圖をすると、お新は頭を掉つた。屹と見て睨むが如く、押して其の意を得させたので、お新は眉を顰めたが、又一つ茶臺に乗せて男の背後から玄關つて行き、

「いかゞです。」と切口上、突込むやうにいはれたから旬作は呼吸を引いて、

「はッ、」

「あなた御勉強でございますね。」

「何なまけて居るですよ。」

「いゝえ、御一勉強なすつて在らつしやるよ。晝

間そんなになさいましても、晩方からすゞみにお出で
掛けなすつちやあ御近所の娘を迷はしちやあ不可
せん。」

「些とも迷ひませんな。」

「あら、嘘ばかり。」

「はゝゝゝはゝゝゝ」と唐突にはめをはづした高
笑、旬作は天窓をかゝへて、仰向けざまに片隅なる
葛籠の上へ寝倒れた。

お新は吃驚して興覺顔、呆氣に取られて座に戻る
と、別に一個茶碗が臺にのせて据ゑてあつた。

「おや、」と嬉しさう。

男は澄して、

「お前にもやるよ。」

「さあ、出かけよう。」と髪結は手拭に包んだ石鹼の箱を持って、勝手から、戸外に稍遠く簾越に薄暗い彼の長火鉢の向うへ顯れて、

「川邊さん、お前さん湯へ行かないの。」と悟れよがしなことを謂ふ。

旬作はむツくと起きて横ずわりになつたが、

「今日は留めぢや。」

「何故さ。」

「直ぐ汗になるから詰らん。」

「何も然うしみつたれることはありませんやね。」

一寸異な驕りツといふのがあるんだから。」

「ふむ、」

「おかみさんが鰻をおごりますとさ。」お新も

浮かすやうに追出をかける。旬作は克明に考へて、

「いや鰻は腹に持つて可かんですよ。」

「ぢやあ軍鶏、ね、軍鶏にしませう。」

「然うか、」と引張つて生ぬるい返事をする。

「然うかつて奴があるものかね。」

「軍鶏なら、うむ、軍鶏なら何ぢやが、僕は未だ

腹はらがくちいでなあ。」

「ぜいたくなことをおいひでないよ。」

「だつて時刻じこくが早いはやや。」 「だから一風呂浴ひとふろあびてさ、薩張さつぱりして、濡手拭ぬれてぬくひを提さげて、お前まへさんと吉野屋よしのの葭寶戸よしずどの入はいつた二階にかいで對向さむかひにならうといふ粹いきな年増としまが居あるんだあね。」

「然さうか。」

「然さうかは困こまつたね、さあお出掛でかけなさいよ。」

「だが、何も一所なにしよに出でんでも可いいでないか。」

「だからお前まへさんは其處そこからおいでなさい、私わたしや勝手口かたてぐちから、可いいかい、兩りやう花道はなみちの出でとやツつけよう。」

「然さうか。」

「一寸串戲いちすんごぢやあない、然さうかは弱よわりましたね。」

よう、川邊かはへさん、其れから中仕切なかじきりをトン／＼、番臺ばんだいで顔かほを見合みあはせて、兩方りやうほうの戸とをがつたり、淺あさくとも清きよき流ながれの杜若かきつばたとか何なんとかいふので出でてさ、吉野屋よしのやで櫻さくら色いろになつて、あとで寄席よせへ行ゆきませう。」

「寄席よせも詰つまらんなあ。」

「あなた、そんなおつき合あひの悪わるいことをいふもんぢやありませんよ。」 とお新しんは遣瀨やるせがない。

「ぢやあまあ先へ行くさ、僕は最う些と經つてか
ら。」

「そんなに長湯ぢやありません。」

「然うぢやあないか、まあゆつくりで可からう。」
「といひながら、次の間の男女をぬすみ目でじろり、
じろり。」

「否さ、じれツたいねえ。」 髪結も餘のことに
口をつぐむ。

「お薪、私はもう歸らう。」 と男は屹となつて
居住居を直した。

「まあ、」 と顔を見た目がうるんで、お新は怨
めしげに、

「罪になりますよ。」 とそツといつて、詮方な
さううに笑顔を造る。

「さあ、川邊さん。」

髪結も堪りかねたか、ぐツと甲高になつて、

「粹事の眞似をするんだといふのに、分らない人
だねえ！」

「あゝあ、それぢやあ出ようかな、何だか氣が重

いで。」

「あなた家うちにばツかり在いらつしやると蟲むしがつきま
すよ。」

とお新しんは口惜くちやしさうにいふ。

「何なに、適宜てきぎに運動うんどうをしとるですよ。」

渠かれは葛籠つづらの蓋ふたを開あけて、疊たゞんだめりやすの襯衣シヤツを
引出ひきだし、古足袋ふるたびと汚きたない靴下くつしたとを五ツ六ツ一居ゐまは
りへ引き散ちらかして。

「はてな、靴くつにしようかな。」と獨言ひとりごとをいふ、

區役所くやくしょの旦那澄だんなすましたもの也なり矣いッ。

扱て手織木綿豎縞の單衣、前申上げたためりやすの
 襯衣、唐縮緬大幅の帯を胸高にぐる／＼と巻いて、
 手拭を疊んで懐中に入れて、茶色の靴下を穿いた、
 之れにて身支度調ひますれば、太夫川邊旬作さつさ
 と出掛けるかと思ふと、否、なか／＼然うでない。

取散した古足袋靴下の類を一々丁寧にまた納めて、
 引抱へるやうにして、葛籠の蓋、舊あつた場所を一
 寸も違へず、置直して押着けて、素直に姿勢を正し
 て立つと、衣紋を直し袖口を引張つて、最う出るか
 と思へば又帯を解いて引張つて皺をのした。

お新は泣出しさうになつて獨りで焦れ込んだが、
 身悶をすると男の膝なる手巾をいきなり引たくる。
 片端を放さず、向うへ引く、此方で引く、二三度引
 張り合ふ内、他愛もなく莞爾してお新は其の手巾
 の上に袖を冠せた。

旬作儀は漸々帯をしめ直し、紙にくるんだ折釘へ

かけてある古い山高帽を取つてソツと指のさきで頂邊を弾いて頭に戴き、赤新聞に包んだ靴を出してふツノと吹いて、揃へて、ぽかんと土間へ置くと自分分は框に腰をかけた、これから靴を穿くのである。

お新の勇みやう一方ならず、

「お出かけですか、」と衝と立つて、後手に、

(占めた)と我知らず男の背を叩いて、玄關に出で旬作の背後に立つた。

「何をしてるのさ。」

路地から高聲で格子戸をのぞいたのは、一足さきへ勝手から出て待つて居たお光である。

餘り待遠さに引返して来たが、旬作が此の装に一驚を吃して、

「へッえ、靴を穿いて来るの、お前さん湯へ行くのに。」

「しかし湯から直ぐに軍鶏屋へ行くんぢやあないのか。」とけるりとして説破一番。

お光はなるほどいふ思入れで、

「それから寄席へ参りますかね。ぢやあ直ぐいらつしやいよ、さきへ行きますから、早くね。」と念を入れる。

「たんと待たしておやんなさいまし、おかみさんは床急ぎだよ。」とお新は捨世辭をいつた。

「似てさ、姉さんに。」

「おや、」

「御機嫌よう。」と謂ひすて、お光は最う大丈夫と見て取つたので、手拭包を手に据ゑて、少しく身を反らした、お轉婆、後齒の下駄、から／＼と溝板を渡つて行く。

此時いまだ、靴の其の片足をだに穿ち果さず、旬作は丁寧に一ツ一ツ編上の紐をかゞつて居た。

「大層面倒なんでしょう。」

「はあ、無茶にやると此の紐がよれるですな。」

聞くと齊しくお新は活發に土間りて、いきなり旬作のつまさきへ屈んで、帯の引するのも構はず、一寸褻さきを膝ではさみ、

「お手傳ひ申しませうね。」と右の靴につかま
つて、互ひ違ひに、手早く紐を組み上げる、両手の
指はちら／＼と白く、恰も卵の花の溢るゝ風情。

「これは、」といつたが旬作は動きも得せず、
帽を脱いで、今一方を穿ち果て、あいたので両手で
据ゑて眞四角に控へて居る。

「さ、あなた。」

「やあ、失敬でありました。」

「お樂み。」と威勢よく門口を出かゝる旬作の
背を一ツくらはしたか、

何の所爲かこれは自分にも分らなかつた。路地を
突當つて後姿が見えなくなるまで、お新は格子から
横顔を出して覗いて居た。

「何だらうまあ、お光さんも気が利かないぢやあ
ないかね、親類か不知、大抵分つた人の癖に今日あ
たりは何處かへ逐出して置けば可いのに、飛んだも
んぢいぢやあないか。」

「一寸さしがあるよ。」

と不意に聲をかけたのは男である。

「氣樂だねえ、」
とうつちやるやうにいつたが、
急に慌しく、

「お忘れもの！」

「可かつた、」
といふは旬作の聲、小戻して突
立つたのが、路地の中ほどでくると向交つてく
／＼出て行つた。あはれ此人後に女一人殺したさ
うな。

【完】